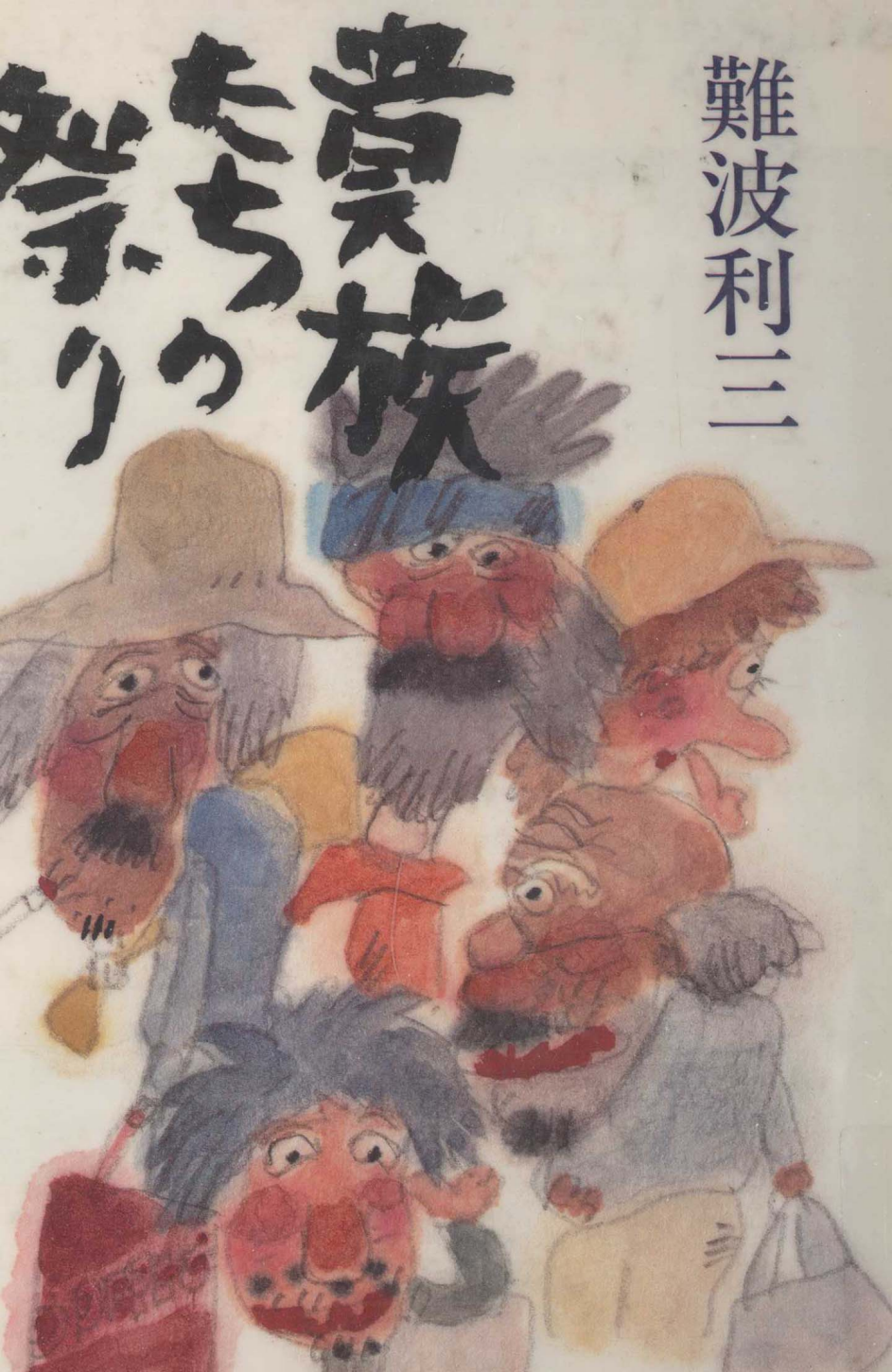
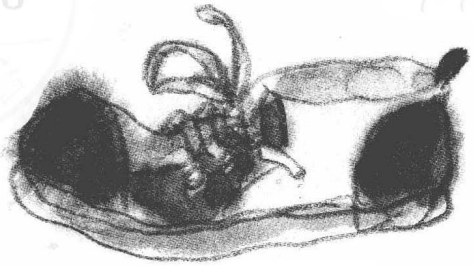
貴族たちの祭り

難波利三



貴族たちの祭り



難波利三

有楽出版社発行・実業之日本社発売

貴族たちの祭り

1984年9月25日　初版発行
著　者　難波　利三
発行者　峯島　正行

発行所　有楽出版社
〒104　東京都中央区銀座2-4-2
誠佳ビル6階
電話　03(567)3784

発売所　実業之日本社
本社　〒104 東京都中央区銀座1-3-9
電話　03(535)4441　振替 東京1-326
支局　大阪市北区曾根崎2-12-7
梅田第一ビル
電話　06(312)1573

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　共文堂製本所

乱丁落丁の場合はお取り替えいたします。
© Toshizō Nanba 1984 Printed in Japan
0093-883070-3214

目次

貴族たちの祭り……3
ドブ川の消える日……55
螢の挽歌……87
競輪同穴……123
木の芽吹く頃……167
青虫たちの掟……199

装画／村上　豊
装幀／サン・プランニング

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

貴族(きぞく)たちの祭(まつ)り

1

ドブ川に、大阪城が逆さまで映っていた。夜空に蒼く、輪郭を浮き上がらせた照明が、そのまま、隆夫のすぐ前の、黒く澱んだ水面に落ちて、立小便のかすかな波紋など寄せつけるふうもなく、またたく間に溶かし、堂々と冴えた偉容を揺るがせている。

梅雨明けを知らせる雷鳴が、夜半、空を駆け廻り、トタン屋根を忙しなく反響させて、眠りを妨げた。雨は上がっているが、不気味な閃光を、まだ、とき折、走らせている。

「くそっ、うるさい雷やったなあ」

良江が小屋の板戸を蹴って、髪をかきむしりながら出てきた。軋んで、自然に閉まるのを待たず、も一度、乱暴に蹴りつけ、隆夫と並んで川っぷちに立った。

「大きな音、させたりなや。まだ、みんな、寝とるがな」

「うちの知ったことか。ほんまに、むしゃくしゃするわ。寝覚め悪いで」

夜中、雷が真上でがなり立て、眠られぬまま、隆夫はそっと、良江をまさぐり出した。汗ばんで良江が癖の、首を振り始めたとき、一米ほど離れて布団を並べている良江の父が、不意に起き上がり、

「もう、わし、我慢でけんわ。今晩中、起きとるでえ」

と、呶鳴った。雷が鳴り出すと、戦時中の爆撃を想い出すといって、異常なほど恐れる。一トン爆弾の落下する響きに、似ているというのだ。

隆夫と良江が、す早く放棄して、毛布を腹へ載せるのと、父が豆電球を引っぱるのが同時だった。気配を知ってか、

「悪いけど、豆球、灯けとくでえ」

と、背中を向けて、あぐらをかいた。鎮まるのを、待つ覚悟らしい。

驚かされた挙句、欲望はそのまま納めるより仕方なかった。寝返りを繰返し、今度は良江が、さぐりの手を伸ばしてきたが、横向きに避けると、仕返しに、股肉を力いっぱいつねった。

「痛いやないか」

隆夫の声に、父が間抜けた注釈を加えた。

「ほらみい、悪い夢、みたんやろ。こんな雷の鳴る晩、無理して寝とっても、ろくなことないでえ。起きとったらどや、二人とも」

返事の代りに、良江は獣のような呻きを、腹立たしそうに漏らした。

それが、まだ不服らしい。

「ほんまに、しゃない親爺や。もう、ちょいで、ええとこやったのに」

愚痴って、首筋を荒々しくたたく。

「起きるなり、その話か。天才やでえ、お前は」

「あんたほどでもないわい」

雨で増水しており、川岸に突き出している枝の下まで、水が盛り上がっている。暗く、危なっかしいその上を、良江は平気で二、三歩進み、スリップをたくし上げた。下にはなにも、着けていない。しゃがむなり、

「えらい、水、増えとるなあ」
と、呟き、放尿を始めた。勢いのよい水音が闇から湧いてくる。白い臀部をむき出したまま、音が止んでも、しばらくその姿勢でいた。
「お城、きれいやなあ」
珍しく感嘆して、前方を見据えている。
「どっちのや。本物か、川の中のやつか」
「どっちも、きれいや。雨で洗われたせいやろな」
良江はまだ、首を上下させて見比べている。
「なんぼ、見とれててもかめへんけど、そないに、お城に向けて、前を広げっぱなしておかんかて、ええやろな。たいがいに、隠してやらんと、蚊に喰われてしまうがな」
背伸びして、隆夫はその場を離れた。良江は顎の下に挟んだチリ紙で、前をぬぐい、ぽいと投げ捨てた。ぼんやりと白く、揺らめいた紙は、すぐ流れに消えた。
「さあ、ぼちぼち、出かけよか」
小屋の横に止めてある軽ライトバンに寄り、腹巻きからキーを取り出して、差し込んだ。
「ちょっと、待ってえな。なんぞ、着てくるわ」
慌てて、良江は小屋へ駆け込み、首にシャツをひっかけたまま、ジーパンを引き上げながら戻ってきた。小刻みにふかせていたエンジンを、一つ、大きく爆発させ、良江が乗り込むと同時に、始動させた。
「また、バタ屋のおっさん、あとで文句ぬかしよるでえ」

良江は隆夫の腹巻きに手を突っ込み、煙草とライターをつかみ出した。
「ほっとけ。音のせんエンジン、あるわけないわい」
ぬかるみを、左右に大きく揺れながら、ゆっくり進んだ。そのたびに、積荷が鳴る。ぶら下げたマスコット人形が、天井を叩いている。
「ひどい運転や」
良江がたまりかねて、ぼやく。
「なにぬかすねん、道が悪いんや」
正規の道路まで、残り三百米は充分にある。草だらけの原っぱを、何十年もの間、勝手に踏みつけて造った道だから、仕方はない。通る人間は、小屋の住人以外は、年に何度か、郵便配達が、大阪市×区△町川っぶち、と、馬鹿丁寧な宛名を記したハガキを投げ込みに来るぐらいで、大きな通りものも、バタ屋夫婦のリヤカーと、このライトバンだけである。
両側には、背たけ以上に伸びた雑草が繁り、夏の午後など、トカゲや蛇が、小ずるそうな首を覗かせているのに、はち合わせたりする。幅十五、六米のドブ川が、むかしは粋な名が付いていたらしいのが、いまはどす黒い廃液を澱ませ、無論、名前など呼ぶ者はなく、ただどやっと、その原っぱを、東西に這っている。
いずれ、大阪湾へ辿りついているのだろうが、原っぱの西隅で、大きく迂回して見えなくなっている先、一体、どう、流れて行き着くのやら、誰も、住人は知りはしない。関心もない。住人の排泄物を、おおらかに包み込んでくれる以外、四六時中、小屋めがけて、悪臭と、蚊やハエを発射してくるようで、辟易こそすれ、感謝の気持ちなど、かけらもない。池のように、澱みはい

つでも同じに思え、微妙な変化など、気づきはしないし、見つけようともしない。犬や猫の死骸が浮いていても、目を向ける者は一人もない。

ただ、長雨の後、増水して悪臭が薄らぐと住人達はこの川に、気を向けることがある。夜、小屋の裏窓を開放し、湿気の強い風をふところへ取込みながら、浮き立つ城に視線を和める。この場所から、丁度、あつらえ向きの角度で、城は水面に揺らぐ。

「大阪中捜したかて、こんなええ場所、どこにもあれへんでえ。わしが、難儀して見つけ当てたんや」

戦後、すぐに住みついた良江の父が、口ぐせに、そう自慢する。だから、みんなは、特別席で観覧する金満家の気分に似せて、危っかしく、小窓から首を、亀のように突き出していても、柔和に瞳を細めたりする。

ドブ川に映えていても、城は城である。重厚な風格に、さしさわりは、少しもない。威張って、睥睨して、逆立ちしている。絶景だった。しかし、日照りが続くと、天守の辺りに、杭にひっかかった芥の山がのぞく。廃材やゴミの群れが浮き上がって、虫喰いのように、影を傷つけることになる。

住人の誰もは、その滑稽さが、奇妙に侘しい。加えて、強烈な臭気を避けるため、窓を閉め切ったままにする。雨は、だから、意外な方向でも城の偉容を回復させるのだった。

道路へ上がるまでに、急勾配の坂がある。丸太を三本横に敷き、その上から土を載せて、道路との段差を繕ってあるのだが、ライトバンは、きまって、そこでエンストを起こす。準備よく、良江は手前で下りた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「一回ぐらい、うまいこと、やりや」
「まかせとけ」
ライトの中を、良江が道路へ辿り着くのを見届け、アクセルを踏んだ。が、正面の道の上で、つっ立っている良江が逃げる必要もなく、いつもの位置で尽きた。待ちかまえていたように、良江が大口を割って、笑い出す。慌てて、サイドブレーキを引き、呶鳴り上げた。
「あほんだら。笑ってんと、早よ、押さんかい」
「どのロや。まかせとけ言うたんは」
応酬しながら、それでも良江はす早く、車の後へ廻った。ドアを半開きにして、隆夫も下り、用心深くブレーキをゆるめ、
「早よ、押さんかい」
「よっしゃ。押すで」
二人は唸りながら、押し上げた。
「今度、がぼっと儲けたら、新車買うたらどやのん」
「夢みるな、あほめ」
左右から乗り込むと、荒っぽく発車した。
城を右手に眺めながら、天王寺へ向う。車の跡絶えた通りを、順調に走った。シャッターで覆われた商店街を抜けて近道し、環状線のガードをくぐると、すぐに、ネオンでふちどりした通天閣が現われた。白く巨大な時計盤が、三時を少し過ぎていた。
道路工事の赤ランプが点滅する手前の角を、左に折れ、暗い通りを抜け出ると、ブロック塀が

往き止まりになっていた。
良江は首を折り、眠りこけている。
「着いたで、起きんかい」
小突かれて、良江は身体をぶっつけ、嚙みつくように、聞きとれぬ言葉を吐いた。
周囲はまだ寝静まっている。物音をさせぬよう、品物を下ろしにかかった。良江も手伝う。すぐ前の外灯の下に寄ってきた野良犬が、小便だけひっかけて、振り向きもせず、闇に消えた。大通りを走り去る車のライトが、一瞬流れ込んできて、塀を照らした。

2

隆夫は三輪車を二台、かつぎ上げ、一台をぶら下げた。良江は大風呂敷の包みを、歩きにくそうに前で下げている。狭い路地を、横歩きになって抜けると、小さな鳥居が、薄墨色の空に浮いていた。
二十段ほどの石段を登り切ったところで、二人はひと息ついた。
「もう、始まってるでえ」
隆夫が呟き、いつもの場所へ向った。
前の広場に黒い人影が蠢いており、その間を、灯りがちらついている。まだ、多い人数ではない。狛犬さんの台座に、三輪車をもたせかけた。良江は地面に包みを開き、衣類の中へ突っ込んできた懐中電灯を抜き出し、一つを隆夫に手渡した。ポケットからタオルを取り出し、隆夫は頬

被りする。良江もネッカチーフを、ま深に被った。

電池をちらつかせながら、二人は持ってきた衣類を、手早く選別して並べた。白っぽく紙のような夏の下着類。艶めかしい色彩のパンティとスリップの集り。ほかに、男物のベルト数本を、蛇のようにからめ、端に並べた。

両手に大包みをかかえた黒い影が、ぬっと隆夫の鼻先へ顔を近づけ、

「来てるな、兄ちゃん」

と、ささやきかけて過ぎた。五、六米先の古井戸のそばで、荷を広げ始める。いつも西成方面から来る老人である。同業者同士、言葉を交わすことはないが、この老人は、隆夫を見かけると、きまって短い言葉をかけた。

中折帽子の縁を深く下げた客が、隆夫の前に坐り込んだ。手にした電池で、品物をなめるように照らし始めている。良江が向き合うように坐り、客の足元へ灯りを当てている。続いて、三人の客が坐り込んだ。用心深く、隆夫はそれぞれの客の足元へ、順ぐりに電池を向けて廻った。

大阪阿倍野のステーションから、歩いて四、五分ほどの、京甲さんという、小さな神社の境内である。毎月、一と六のつく日の早朝、三時ごろから、夜明けまでの二時間ほどに、重苦しい商売が催される。一六市とか、またの名を、ドロボー市ともいわれており、大阪中の、その連中が、品物を捌きに集まってくる。

買手は、古物商、古着屋という、専門筋から、近郊を廻る行商人や、掘り出し物を狙う一般の客まで、さまざまである。商いされる品も、まず、大抵はそろっている。

わりと値のはる、テレビ、自転車、ステレオ、ラジオ、洗濯機、カメラ、テープレコーダー、

扇風機、などから、ハンドバッグ、カバン、靴、傘、下駄、スリッパ、バケツ、洗面器のような日用品や、衣類は、モーニング、訪問着、背広から、パンツ、フンドシ、生理帯まで、はば広くあり、変ったところでは、カツラ、義足、松葉杖、入歯、布団一組、便器まで並べてある。水道の蛇口や、商店名入りの鏡も数が多い。公衆便所が、仕入れ先になるらしい。使いかけの口紅も、バケツに一ぱい溜めて、並べてある。意外と少ないのは、財布で、これは、そのミチの専門家筋では、すぐに始末をつけてしまうからしい。

品物は、凡て仕入れがただなので、買手も精一杯、安値を吹っかけて、掛合うことになる。

モーニング一式が、最高値の二千円。訪問着は千円から二千円まで。自転車はサイクリング用で八百円。旧式のは四百円。そのかわり、乗っていて、もとの持ち主に追いかけられないという、保証はない。扇風機は五百円ぽっきり。

日用品の類は、高いもので三百円どまり。セーターやシャツは、百円以内。下着は十円まで。靴下も、十足まとめて五十円。口紅は三箇十円。

客は電池を片手に、品物の山をかき廻し、選び出しては、売手に勝手な値段を告げる。その値で満足なら、売手は手の平を突き出して、金を要求する。安すぎて不服なら、すぐに、買手の握っている品を、ひったくろうとする。その間、売手はいっさい無言で、買手の吐く押し殺した値段だけが、次々と飛んでくる。そのたびに、売手は気忙しく、電池を品物に当て、手先の返答を返す。暗い中で、灯りを浴びた売手の腕先だけが、懸命に商いをしている感じである。よく働く手ではある。

隆夫と良江の扱う品は、スーパーマーケットで、万引きしてくる品物ばかりである。隆夫が見

張りに廻り、良江が大きな紙袋に、手早く落とし込んで、頂戴してくる。今日のように、三輪車や、乳母車や、ときには自転車をばらして、部品にしたりして、持ち込むこともあるが、これは、住人の、バタ屋夫婦から買取ってくるのだ。彼らは、正規に買上げてくると言っているが、新品同様の品があることを思えば、案外、盗ってくることもあるらしい。娘の花子はスリの常習者で、この三月、花見前のいっせい取り締りにひっかかり、いま、何度目かのブタ箱入りを喰っている。娘は娘、わてらは善良な市民や——バタ屋夫婦は、酔うと声高に胸を張ってみせるが、善良が、どこまでの範囲を含むのやら、あやふやである。良江の父だけが、地味に露天商を営んでいるので、住人中、ただ一人の、善良な市民といえるかもしれない。それとて、税金を納めた話は聞いたことがない。

眼鏡を光らせた客が、ベルトを抜き、隆夫の前へ突き出して言った。

「百円——」

黙って、手を振ると、追っかけて、

「ほなら、百五十円や」

まだ承知せず、客の握っているベルトをたぐり、重い声を出した。

「見てくれ。わいとこの品物は、みな、新品ばっかりや。これかて、ワニやで」

客はもう一度、電池を注意深くこすりつけていたが、

「ほな、二百円で、どや」

隆夫はOKの合図を返し、金を要求した。

下着を漁っていた客が、水色のパンティを、何度も鼻先へこすりつけている。そのたびに、視

線を良江に這わせてくる。たまりかね、良江は皮肉った。
「残念やけど、おっさん。それ、うちのお古と違うで。新品や。鼻、こすりつけても、あかんでえ」
商売にする気か、趣味なのか、結局、パンティばかり十枚を買い、腹巻きの中へねじ込んで去った。
上空が白っぽく潤み、東の端にオレンジ色の横縞が走り出すと、境内の人影が薄らぐ。手早く店じまいする姿が、闇を動かすだけで、見る間に、客足は消えてゆく。光を恐れる悪魔のように、売手も買手も、間近に迫った夜明けを嫌い、敏捷に振舞って、境内をのがれ出る。
「ちえっ、今日は骨折り損か」
ぼやきながら、隆夫は売れ残った三輪車をかつぎ上げた。衣類はほとんど残品がない。良江は大風呂敷を腰に巻きつけ、歩きながら、目をこすりつけて、両手の平で金勘定を始めている。
「落とすなや」
「わずかな儲け、落としてたまるかい」
とき折、硬貨を空にかざして確認し、整理をつけると、再び、ひい、ふう、みい、と、数え始め、隆夫の背後にくっついて歩く。
前方の空にさした赤味が、急速に広がりを増し、乳白色の間にわずかだけ残っている黒い流れを、塗りつぶしていく。数歩、歩む間に、黒は白く褪め、白は鮮やかな紅に侵されて、一転し、街並みを浮き上がらせて、明るさを増す。目まぐるしく変転する夜明け前の空に、追いたてられるように、二人は歩を速めていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com